

『資本論』の論理

—「蓄蔵貨幣の形成」の「論理的構文論」による読解—

川崎 誠

「慮り浅けれど笑みをふくみて厳なる裁きをくだす、
大宮人のかんばせもて……」(クロップシュトック) ⁽¹⁾

—『資本論』の「論理を読む」ということ

(1) ヘーゲルによる弁証法の「叙述」

『資本論』の方法は「弁証法的方法」(p.27)であり ⁽²⁾、その弁証法をマルクスは次のように理解していた。

＜資＞ 弁証法は、現存するものの肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定、その必然的没落の理解を含み、どの生成した形態をも運動の流れのなかで、したがってまたその経過的な側面からとらえ、なにものによっても威圧されることなく、その本質上批判的であり革命的である。(p.29)

そしてこの弁証法はヘーゲルによって叙された。だからマルクスはヘーゲルを高く評価する。

＜資＞ 私は、自分があの偉大な思想家の弟子であることを公然と認める。……(中略)……弁証法がヘーゲルの手のなかでこうむっている神秘化は、彼が弁証法の一般的な運動諸形態をはじめて包括的で意識的な仕方で叙述したということを、決してさまたげるものではない。(p.28)

謂う所の「弁証法の一般的な運動諸形態」の「包括的で意識的な仕方の叙述」とは、言うまでもなく『論理学』*Wissenschaft der Logik*——本稿では以下『大論理学』と呼ぶ——である。ではヘーゲルは弁証法をどのように叙述したのか、具体的に見てみよう。『大論理学』に次の一節がある。

＜大＞ 定立された存在はまだ反省規定ではない、それは否定一般として規定態にすぎない。しかし定立する運動はいまや^{nun}外的反省との統一のうちにある；外的反省はこの統一において絶対的な前提する運動である、すなわち、反省の自己自身からつきはなす運動・あるいは反省そのものとしての規定態を定立する運動である。定立された存在はだからして定立された存在そのものとしては否定である；しかし〔外的反省によって〕前提された定立された存在としてはこの否定は自己へと反省した否定としてある。こうして定立された存在は反省規定である。(WdL II S.33)

冒頭の「定立された存在は反省規定ではない」が、わずか数個の文を経て「定立された存在は反省規定である」とされる。一見すれば矛盾と思われる叙述が許されるのは、著者であるヘーゲルの思考がそのように展開し、その思考過程がこの叙述で表現されているからである。つまり文を連ねることで思考が展開したのだから「連文的推論」だが、マルクスが評価した「包括的で意識的な仕方の叙述」とはこの連文的推論にはかならない。

なるほどここでの「連文的推論」に対しては、「要するに『いまやnun』とは、第一小節から第二小節へ移ったことをさす以上の意味をもっていない」のであって、「このような展開が論理的展開であるとは認めがたい」（寺沢恒信。以文社版『大論理学』2 p.298 訳者注63）、という批判もありうる。けれどもその当否は別にしても、かかる批判そのものは、ヘーゲルのものした連文が「論理的展開」の表現として不十分だという指摘であり、だから批判者が要求していることも、「定立された存在がどのようにして反省規定になった」のか、その推論過程を十全に伝える文の連なり以外ではない。叙述すなわち連文的推論において論理が展開されるということは動かないのであり、これは「論理学」が「思考の学 *die Wissenschaft des Denkens*」（*Enzyklopädie* § 19）とされるゆえんでもある⁽³⁾。

(2) 「さか立ち」

しかし同時に、マルクスはヘーゲルの弁証法に対して次のような批判も遺している。

＜資＞ ヘーゲルにとっては、彼が理念という名のもとに一つの自立的な主体に転化しさえした思考過程が、現実的なものの創造者であって、現実的なものはただその外的現象をなすにすぎない。私にあっては反対に、観念的なものは、人間の頭脳のなかで置き換えられ、翻訳された物質的なものにほかならない。／……（中略）……弁証法はヘーゲルにあってはさか立ちしている。神秘的な外皮のなかに合理的な核心を発見するためには、それをひっくり返さなければならない。（p.28）

「さか立ち」のいかなるものか、具体的に見てみよう。ソシュール『一般言語学講義』に次の言語事実が挙げられる。

＜講義＞ これ〔独語で *gast* の複数が *gasti* → *gesti* → *geste* (*Gäste*) と変遷したこと〕とほぼ似た事実が、アングロサクソン語でも生じた：最初は *fōt* 「足」、複数 **fōti*；*tōp* 「歯」、複数 **tōpi*；*gōs* 「ガチョウ」、複数 **gōsi*、etc. といった；ついで第一次の音韻変化、すなわちウムラウトのそれによって、**fōti* が **fēti* となり、第二次の変化、すなわち末尾音 *i* の脱落によって、**fēti* が *fēt* となった；そのとき以後 *fōt* の複数は *fēt*、*tōp* は *tēp*、*gōs* は *gēs* である（近英、*foot* : *feet*、*tooth* : *teeth*、*goose* : *geese*）。（p.118）

そして

＜講義＞ 言語というものは、われわれがややもすれば抱きたがる謬想とはうらはらに、表現

すべき概念を顧慮して創造され・配備された機構ではない。われわれはかえって、変化から生じた状態は、それが新たに取込んだ意義をしるすべく運命づけられたものではない、と見るのである。ある偶生的状態が与えられた： $f\ddot{o}t : f\ddot{e}t$ が、すると人はこれを、単数・複数の別を立てるために流用するのである； $f\ddot{o}t : f\ddot{e}t$ は $f\ddot{o}t : *f\ddot{o}ti$ に比べて別に出色のものとも思えない。おのおのの状態において、与えられた資料に魂が吹きこまれ、活が入れられるのだ。(p.120)

ここに叙されるのは概念「 $f\ddot{o}t$ の複数」が歴史的に如何に展開したかだが、それは「一つの自立的な主体」である「理念」(概念)がその運動において自ら展開する *sich entwickeln* といった、ヘーゲル的な展開ではない。そうではなくて、人間の現実的な言語活動における変遷である。そもそも「音韻変化」——「 $*f\ddot{o}ti$ が $*f\ddot{e}ti$ となり、 $*f\ddot{e}ti$ が $f\ddot{e}t$ となった」——や「流用」——「おのおのの[偶生的]状態において、与えられた資料に魂が吹きこまれ、活が入れられる」——といった人間の営み(経験)がなければ、「 $f\ddot{o}t$ の複数」が「 $*f\ddot{o}ti \rightarrow *f\ddot{e}ti \rightarrow f\ddot{e}t$ 」と展開することもなかったからである。しかるにヘーゲルはこの人間的な営みをいわば括弧に入れてしまい、その翻訳にすぎない「観念的なもの」を運動主体に据えた、マルクスによる批判の眼目はここにある。この言語事実についてであれば変遷の「動因」が探られようが、それは「 $*f\ddot{o}ti$ が $*f\ddot{e}ti$ となる」という音韻変化——すなわち人間の発話における音韻の変化——にでなく、概念の「自己自身への自分の否定的活動性」といったものにでも求められよう。

では「さか立ち」が正され、「ひっくり返された」弁証法の叙述とはどのようなものであるか。これについてもマルクスは次の言葉を遺している。

＜資＞ もちろん、叙述の仕方は、形式としては、研究の仕方と区別されなければならない。研究は、素材を詳細にわがものとし、素材のさまざまな発展諸形態を分析し、それらの発展諸形態の内的紐帯をさぐり出さなければならない。この仕事を仕上げてのちに、はじめて、現実の運動をそれにふさわしく叙述することができる。これが成功して、素材の生命が観念的に反映されれば、まるで“先験的な”構成とかかわりあっているかのよう、に、思われるかもしれない。(p.27)

無論マルクスは『資本論』の叙述を成功した叙述だと考えていたであろう。そこでは「素材」の「発展諸形態の内的紐帯がさぐり出され」、その上で「現実の運動がそれにふさわしく叙述されている」。まさに「まるで“先験的な a priori”構成とかかわりあっているかのよう」なのだが、謂う所の「“先験的な”構成」がヘーゲル弁証法のそれであることは言うまでもなかろう。成功した叙述においては「素材の生命が観念的に反映される」が、かく反映されたものこそ上に引いたヘーゲルの「観念的なもの」、すなわち「人間の頭脳のなかで置き換えられ、翻訳された物質的なもの」だからである。

そうであればその叙述において、マルクスの弁証法はヘーゲルのそれと同様の展開を示す。というのは、かくかくに運動するのは現実的なものだが、それに「ふさわしい叙述」と言えば、その現実的なものの「素材の生命を観念的に反映した」もののしかじかの展開以外ではないからである。マルクスによるヘーゲル批判はただ一点、「素材の生命の観念的な反映」が消し去られたことであ

る。「ひっくり返されなければならない」と聞いて、叙述においてもマルクスはヘーゲルと真逆だと考えるならば、大きな間違いを犯すことになる。

二 「蓄蔵貨幣の形成」読解

(1)

＜資＞ 第3章 第3節貨幣 a 蓄蔵貨幣の形成 1 パラグラフ 第1文

二つの相対立する商品変態の連続的循環または販売と購買との流動的転換は、貨幣の休むことのない通流に、または流通の“永久運動機関”としての貨幣の機能に、現われる。Der kontinuierliche Kreislauf der zwei entgegengesetzten Waarenmetamorphosen oder der flüssige Umschlag von Verkauf und Kauf erscheint im rastlosen Umlauf des Geldes oder seiner Funktion als perpetuum mobile der Cirkulation.

＜大＞ C 外のものと内のものとの相関 1 パラグラフ 第1文

全体と諸部分との相関は直接的な相関である Das Verhältnis des Ganzen und der Teile ist das unmittelbare ;

『資本論』は第3章「貨幣または商品流通」で第1節「価値の尺度」・第2節「流通手段」を承けての第3節「貨幣」であり、節全体の短い序説の次に「a 蓄蔵貨幣の形成」が説かれる——「b 支払手段」「c 世界貨幣」と続いて第3章は終わる——。節全体への序説は次である。

＜資＞ 価値尺度として機能し、それゆえまた、みずからか代理物かによって、流通手段として機能する商品は貨幣である。それゆえ、金（または銀）は貨幣である。金が貨幣として機能するのは、一面では、それが、その金の（または銀の）肉体のままで、それゆえ貨幣商品として、現われなければならない場合、したがって、価値尺度におけるように単に観念的でもなければ、流通手段におけるように代理可能なものとしてでもなく現われなければならない場合であり、他面では、金の機能が金自身によって果たされるか代理物によって果たされるかにかかわりなく、その機能が、金を、唯一の価値姿態または交換価値の唯一の適当な定在として、単なる使用価値としての他のすべての商品にたいして固定する場合である。

他方『大論理学』「C 外のものと内のものとの相関」は本質論第二編「現象」第三章「本質的相関」の最終節であり、これに先行しては「A 全体と諸部分との相関」「B 力とその発現との相関」の二節が説かれていた。そこで1パラグラフでは、これまでの論理の進展が概括されて「外のものと内のものとの相関」への反省が説かれる。第1文が「全体と諸部分との相関は直接的な相関である」と説くのはこのためである。

さて『資本論』第1文だが、「二つの相対立する商品変態の連続的循環または販売と購買との流動的転換」というのだから、「二つの商品変態」のそれぞれは「連続的循環」を「全体」と見ての

「諸部分」であり、同じく「販売と購買」のそれぞれは「流動的転換」を「全体」と見ての「諸部分」である。この「諸部分」と「全体」とが「貨幣の休むことのない通流に、または流通の“永久運動機関”としての貨幣の機能に、現われる〔現象する〕」のだが、この「現象 *Erscheinung*」と「本質的相関」との連関については『大論理学』が次のように説いていた（「本質的相関」章冒頭）。

＜大＞ 現象の真理態は本質的相関である。本質的相関の内容は直接的な自立態をもっている、しかも実に存在的な直接態および反省した直接態・ないしは自己と同一的な反省をもっている。同時にその内容はこの自立態において相対的な内容であり、端的に自分の他者への反省として・ないしは自分の他者との関係という統一としてのみある。（WdL II S.164。傍点は引用者）

つまり「貨幣の休むことのない通流」または「流通の“永久運動機関”としての貨幣の機能」は「現象」だが、その真理態たる「本質的相関」の第一は「全体と諸部分との相関」であるから、「貨幣の休むことのない通流」[W-G-W]または「流通の“永久運動機関”としての貨幣の機能」の真理態もまずは「二つの相対立する商品変態の連続的循環または販売と購買との流動的転換」なのである。そして「循環」が「連続的」であり「転換」が「流動的」なのだから、ここでも「全体[W-G-W]と諸部分[W-G・G-W]との相関」は直接的だと謂うのである。

(2)

＜資＞ 第3章 第3節貨幣 a 蓄蔵貨幣の形成 1パラグラフ 第2文

変態系列が中断され、販売がそれに続く購買によって補われなくなるやいなや、貨幣は不動化される。あるいは、ボワギュベールの言うように、“可動物”から“不動物”に、鑄貨から貨幣に、転化される。Es wird immobilisiert, oder verwandelt sich, wie Boisguillebert sagt, aus meuble in immeuble, aus Münze in Geld, sobald die Metamorphosenreihe unterbrochen, der Verkauf nicht durch nachfolgenden Kauf ergänzt wird. [原書は一文]

＜大＞ C 外のものと内のものとの相関 1パラグラフ 第2文

反省した直接態と存在的な直接態とはそれだからこの相関においてはそれぞれが固有の自立態をもっている die reflektierte und die seiende Unmittelbarkeit haben daher in ihm jede eine eigene Selbständigkeit ;

まず『大論理学』だが、上に引いた「本質的相関」章の冒頭に「本質的相関の内容は直接的な自立態をもっている、しかも実に存在的な直接態および反省した直接態をもっている」とあった。ここ第2文ではその「反省した直接態と存在的な直接態」について、両者は「この（全体と諸部分との）相関においてはそれぞれが固有の自立態をもっている」と謂う。かく謂われるのは「全体と諸部分との相関は直接的な相関である」（第1文）が、かかる「直接的〔非媒介的〕な相関」においては「両側面のそれぞれの固有の自立態が相関の形式をなしているゆえんのものである die eigene

Selbständigkeit jeder der beiden Seiten ist dasjenige, was die Form des Verhältnisses ausmacht」(WdL II S.165)から・要するに「相関」とは「それぞれの固有の自立態」が存してこそその「相関」だからである。

次に『資本論』は『大論理学』との間に次の対応をもつ。

「反省した直接態」：「可動物」・「鑄貨」

「存在的な直接態」：「不動物」・「貨幣」

「固有の自立態」：「可動物」と「不動物」

先の叙述との連関を説けば、「連続的循環」(W-G-W)なる「全体」における「鑄貨」・「可動物」が、「変態系列が中断され、販売がそれに続く購買によって補われなくなる」と、「販売」(W-G)なる「諸部分」における「貨幣」・「不動物」に転化して「固有の自立態」になるのである。そして「不動物」が「固有の自立態」であれば、これとの対立において「可動物」も同じく「固有の自立態」である。

(3)

<資> 第3章 第3節貨幣 a 蓄蔵貨幣の形成 2パラグラフ 第1文

商品流通そのものの最初の発展とともに、第一の変態の産物である、商品の転化された姿態または商品の金^{さなぎ}蛹を固持する必要と情熱とが発展する。Mit der ersten Entwicklung der Waarencirkulation selbst entwickelt sich die Nothwendigkeit und die Leidenschaft, das Produkt der ersten Metamorphose, die verwandelte Gestalt der Waare oder ihre Goldpuppe festzuhalten.

<大> C 外のものと内のものとの相関 1パラグラフ 第3文

だがそれらは本質的な相関のうちにあるので、それらの自立態はそれらの否定的統一にすぎない。aber indem sie im wesentlichen Verhältnisse stehen, so ist ihre Selbständigkeit nur ihre negative Einheit.

『大論理学』での「それら」は「反省した直接態と存在的な直接態」それぞれの「自立態」であり、説かれるところの詳細は次である (A「全体と諸部分との相関」)。

<大> だがそれぞれの側面[全体と諸部分]が[・]それ[・]だけ[・]でも持っているそれらの自立態はむしろそれら自身の否定である。それだからおのおのの側面はそれらの自立態をそれら自身のもとではなくて他の側面のもとにもっている；[それぞれの側面の]存立をなしているこの他の側面はそれぞれの側面の前提された直接的なものであり、この直接的なものが最初のもの・かつその側面の端初であるといわれている；だがしかしそれぞれの側面のこの[いわゆる]最初のは、それ自身が最初のものではなくて他者のもとに自分の端初をもっているものにすぎないのである。

(WdL II S.170)

「両側面のそれぞれの固有の自立態」すなわち「それぞれの側面が[・]それ[・]だけ[・]で für sich もっているそれらの自立態」が「むしろそれら自身の否定」であり、それゆえ「反省した直接態と存在的な直

接態」とは「それらの自立態をそれら自身のもとにではなくて他の側面のもとにもっている」。そこで第3文は「それらの自立態はそれら〔自分と他者〕の否定的統一にすぎない」と謂う。

『資本論』である。「商品流通そのものの最初の発展」とは「変態系列が中断され、販売がそれに続く購買によって補われなくなる」ことに先立つところの「最初」の謂いだから、要するに商品変態 $W - G - W$ であり、「この側面がそれだけでもっているその自立態」は上に述べたように「可動物」たる「鑄貨」である。だがこの「側面はそれの自立態をそれ自身のもとにではなくて他の側面のもとにもっている」のだから、「可動物」（鑄貨）は「それの自立態」を「不動物」（第一の変態の産物）すなわち「金蛹」のもとにもっている。「二つの発展」——「商品流通そのものの最初の発展」と「金蛹を固持する必要と情熱の発展」——が「同時 mit」であるゆえんであり、これは「可動物」と「不動物」とは「本質的な相関のうちにあるので、それらの自立態はそれらの否定的統一にすぎない」ということである。

(4)

＜資＞ 第3章 第3節貨幣 a 蓄蔵貨幣の形成 2パラグラフ 第2文・第3文

②商品を買うためにではなく、商品形態を貨幣形態に置き換えるために、商品が売られる。

Waare wird verkauft, nicht um Waare zu kaufen, sondern um Waarenform durch Geldform zu ersetzen.

③この形態変換は、素材変換の単なる媒介から目的そのものになる。Aus bloßer Vermittlung des Stoffwechsels wird dieser Formwechsel zum Selbstzweck.

＜大＞ C 外のものと内のものとの相関 1パラグラフ 第4文

さてこのことは力の発現においては定立されている Dies ist nun in der Äußerung der Kraft gesetzt ;

『大論理学』の「このこと」は「相関する両者の自立態はそれらの否定的統一である」ことである。そして先立って説かれていたように、「この〔自立態がその他者によって媒介され・定立されている、という〕規定において相関はもはや全体と諸部分との相関ではない」（WdL II S.170）のであって、そこで「このことが力の発現においては定立されている」と謂われる。これは換言して、「直接的な自立態と反省された自立態とは、先行する〔全体と諸部分との〕相関においては独立に〔それだけで〕存在する側面ないしは〔両〕極であったが、力においては揚棄された自立態ないしは契機として定立されている」（WdL II S.173。「力とその発現との相関」序説）ということである

『資本論』第2文である。「商品売る」ことが、「商品を買うために、商品売る」ことと「商品形態を貨幣形態に置き換えるために、商品売る」こととに区別される。前者において「商品売る」（変態 $W - G$ ）ことは、「全体」たる $W - G - W$ の「部分」として「独立に存在する側面ないしは〔両〕極 für sich bestehende Seiten oder Extreme」の一である。

他方後者において「商品売る」ことは、「揚棄された自立態ないしは契機として定立されている als aufgehobene Selbständigkeit oder als Momente gesetzt」。「商品売る」ことすなわち「商品形態を貨幣形態に置き換える」ことだからである。

第3文。「この形態変換」は「商品形態の貨幣形態への置き換え」だが、それが「素材変換の単なる媒介」であるとき、「商品の交換価値の自立的表示は、ここでは一時的契機でしかない」(p.218。第2節「流通手段」の最終パラグラフ)。というのは「この自立的表示はただちにふたたび別の商品によって置き換えられる」(同)からである。つまり両形態(W・G)の「無限進行 unendlicher Progreß」である。これに対して「目的」とは、「これらの形態のもとで無限進行のうちにある他者は、これらの形態にとってさしあたり外的なものとして定立されている概念である」(WdL II S.444。傍点は引用者)と説かれる、その他者であり、つまり「形態変換が、素材変換の単なる媒介から目的そのものになる」ことにおいて、「(両) 自立態がそれらの否定的統一にすぎない」ことが「定立されている」のである。

(5)

<資> 第3章 第3節貨幣 a 蓄蔵貨幣の形成 2パラグラフ 第4文・第5文

④商品の脱皮した姿態が、商品の絶対的に譲渡されうる姿態または単に一時的な貨幣形態として機能することをさまたげられる。Die entäußerte Gestalt der Waare wird verhindert als ihre absolut veräußerliche Gestalt oder nur verschwindende Geldform zu funktionieren. ⑤こうして、貨幣は蓄蔵貨幣に化石し、商品販売者は貨幣蓄蔵者になる。Das Geld versteinert damit zum Schatz, und der Warenverkäufer wird Schatzbildner.

<大> C 外のものと内のものとの相関 1パラグラフ 第5文

反省した統一はこの統一自身を外面態へと移し変える運動として本質的に他者に成る運動である die reflektierte Einheit ist wesentlich das Anderswerden als Übersetzen ihrer selbst in die Äußerlichkeit ;

「(両) 自立態がそれらの否定的統一である」ことが「力の発現においては定立されている」ので「(力とその発現との) 反省した統一」が謂われるが、それが「この統一自身を外面態へと移し変える運動」であることについては先行して次が説かれていた(「b力の誘発」1パラグラフ)。

<大> 力は制約されている、というのは、力の含んでいる直接的な現実存在の契機は定立されたものとしてのみあるが、——しかしながらこの契機は同時に直接的なものであり、力がそのなかで自己自身を否定している前提されたものであるからである。力にとって現存する外面態はそれだから力自身の前提する活動性そのものであって、この活動性はまずはじめには他の力として定立されている。(WdL II S.176)

「反省した統一がこの統一自身を外面態へと移し変える運動 das Übersetzen」であるのは、この「外面態」(移し変えられたもの Übergesetztes、したがって定立されたもの Gesetztes) が「力[反省した統一]」がそのなかで自己自身を否定している前提されたもの Vorausgesetztes であるからである」——「定立的反省は前提的反省である」(WdL II S.28) ——。そしてその「力にとって現存する外面態は力自身の前提

する活動性そのものであって、この活動性はまずはじめには他の力として定立されている」のだから——「定立的反省は……前提的反省として〔ありながら〕端的に定立的反省である」(ibid.)——、「力は本質的に他者に成る運動である」。

『資本論』第4文。いま「形態変換」 $W - G$ は「目的」・すなわち「反省した統一」である。そして「商品の脱皮した姿態」(G)は、先には次のように説かれたのだが——「商品の交換価値の自立的表示は、ここでは一時的契機でしかない。この自立的表示はただちにふたたび別の商品によって置き換えられる」(再掲)——、いまは「商品の絶対的に譲渡されうる姿態または単に一時的な貨幣形態として機能することをさまたげられる」。換言してGが $W - G - W$ なる「循環Kreislauf」(p.190)から外されるのだが、それは「反省した統一〔目的〕がこの統一自身を外面態へと移し変える運動」だからである。そして上述のように、この「外面態」(G)は「力〔目的〕がそのなかで自己自身を否定している前提されたものであり」、また「この〔力自身の前提する〕活動性はまずはじめには他の力として定立されている」のであるから、第5文「貨幣は蓄蔵貨幣に化石し、商品販売者は貨幣蓄蔵者になる」(本質的に他者に成る)——‘Schatz’は「埋蔵物」したがって「不動物」であり、「可動物」(循環するG)の「他者」である——。

(6)

<資> 第3章 第3節貨幣 a 蓄蔵貨幣の形成 3パラグラフ 第1文

商品流通のそもそもの始まりにおいては、使用価値の過剰分だけが貨幣に転化される。Grade in den Anfangen der Waarencirkulation verwandelt sich nur der Ueberschuß an Gebrauchswerthen in Geld.

<大> C 外のものとの内ものとの相関 1パラグラフ 第6文

だが外面態はまた同じく反省した統一へと直接にとりもどされている aber diese ist ebenso unmittelbar in jene zurückgenommen ;

『大論理学』で「だが」とは、「反省した統一はこの統一自身を外面態へと移し変える運動だが」、の謂いである。第6文はその「移し変えられたもの」(外面態)が「また同じく反省した統一へと直接にとりもどされている」と謂う。「二つの力」の相関に関する次の叙述が参考になる(「b力の誘発」3パラグラフ第3文)。

<大> 「力自身の」前提する活動性はまた同じく自己内反省であるから、それはあの自分の否定を揚棄する運動であり、そしてこの否定を自己自身として・あるいは自分の外的なもの〔発現〕として定立する。(WdL II S.176)

「前提する活動性」の「(自分の) 否定」は「前提されたもの」であり、いまそれは「移し変えられたもの」(外面態)・「他者」である。つまり「前提する活動性」は「外面態」(他者)を「自己自身として定立する」のだから、「外面態は前提する活動性へと直接にとりもどされている」。そしてそ

の「前提する活動性」は「[統一] 自身を他者 [外面態] へと移し変える運動」として「反省した統一」であるから、「外面態は反省した統一へと直接にとりもどされている」のである。

以上の具体例を『資本論』が供する。まず「商品流通の始まるちょうどそのとき *Grade in den Anfängen der Waarencirkulation* (転化される)」ということは、「商品流通の始まりにおいて直接に (転化される)」のである。そして「使用価値の過剰分が貨幣に転化される」のだから、「転化」は「前提する活動性」であり、「前提されたもの」は「使用価値の過剰分」である。それはいま・すなわち「転化」において、「移し変えられたもの」(外面態)たる「貨幣」である。つまり「転化」(前提する活動性)は「貨幣」(外面態)を「自己自身として定立する」のだから、「外面態 (貨幣) は前提する活動性 (転化) へと直接にとりもどされている」。そして「転化 *Verwandlung*」すなわち「(自身を他者へと) 移し変える運動 *das Übersetzen*」であるから、「外面態は反省した統一へと直接にとりもどされている」。

(7)

<資> 第 3 章 第 3 節貨幣 a 蓄蔵貨幣の形成 3 パラグラフ 第 2 文

こうして、金銀は、おのずから、あり余るものの、または富の、社会的表現となる。Gold und Silber werden so von selbst zu gesellschaftlichen Ausdrücken des Ueberflusses oder des Reichthums.

<大> C 外のものと内のものとの相関 1 パラグラフ 第 7 文

自立的な [二つの] 力の区別は揚棄される der Unterschied der selbständigen Kräfte hebt sich auf ;

「外面態 (他者) はまた同じく (力と他の力との) 反省した統一へと直接にとりもどされている」のである。「自立的な [二つの] 力の区別は揚棄される」のである。

『資本論』で「金銀」は「貨幣」であり、「あり余るもの、または富」は「使用価値の過剰分」である。前者が後者の「社会的表現となる」のであるから、「自立的な両者の区別は揚棄される」。というのは「社会的表現」とは社会によって受け入れられている表現だからである——例えば「食べられる」は「社会的表現」であり、これに対していわば自立的に発せられる「食べれる」は「余分なもの *Überfluß*」である。後者はテレビでは自立性をもたず、テロップで「食べられる」に直される。しかし「食べれる」の使用が多数派になれば (文化庁「国語に関する世論調査」)、「余分なもの」も「社会的表現となる」——。

(8)

<資> 第 3 章 第 3 節貨幣 a 蓄蔵貨幣の形成 3 パラグラフ 第 3 文

かたく閉ざされた欲求の範囲が自給自足のための伝統的な生産様式に照応している諸民族においては、蓄蔵貨幣形成のこの素朴な形態が永久化される。Diese naive Form der Schatzbildung verewigt sich bei Völkern, wo der traditionellen und auf Selbstbedarf gerichteten Produktionsweise ein fest abgeschlossener Kreis von Bedürfnissen entspricht.

<大> C 外のものと内のものとの相関 1 パラグラフ 第 8 文

力の発現は反省した統一の自己自身との媒介にすぎない。die Äußerung der Kraft ist nur eine Vermittlung der reflektierten Einheit mit sich selbst.

「力の発現」において「自立的な〔二つの〕力の〔形式上の〕区別は揚棄される」から、「力の発現は反省した統一〔力〕の自己自身との媒介にすぎない」。

『資本論』で「蓄蔵貨幣形成のこの素朴な形態」とは「商品流通のそもそもの始まり」の「形態」(形式)、すなわち「金銀が、あり余るものの、または富の、社会的表現〔発現〕である」というその「統一形態」である。そして「形態」が「自己を永久化する sich verewigen」のであるから、「形態」は「自己自身との媒介にすぎない」。つまり「商品流通のそもそもの始まり」の「形態」が永久化されるのだから、それは「かたく閉ざされた欲求の範囲が自給自足のための伝統的な生産様式に照応している諸民族において」のことである。

(9)

<資> 第 3 章 第 3 節貨幣 a 蓄蔵貨幣の形成 3 パラグラフ 第 4 文～第 6 文

④アジア人、ことにインド人の場合がそうである。So bei den Asiaten, namentlich de Indern. ⑤商品価格は一国に存在する金銀の総量によって規定されると盲信するヴァンダリントは、なぜインドの商品はあんなに安いのか？ と自問して、⑥インド人は貨幣を埋蔵するからだと答えている。Vanderlint, der die Waarenpreise durch die Masse des in einem Land befindlichen Goldes und Silbers bestimmt wähnt, fragt sich, warum die indischen Waaren so wohlfeil? Antwort: Weil die Inder das Geld vergraben. [原書は二文]

<大> C 外のものと内のものとの相関 1 パラグラフ 第 9 文

空虚な透明な区別・映現が現存しているにすぎないが、この映現とは自立的な存立そのものであるところの媒介である。Es ist nur ein leerer durchsichtiger Unterschied, der Schein vorhanden, aber dieser Schein ist die Vermittlung, welche das selbständige Bestehen selbst ist.

「力の発現は反省した統一の自己自身との媒介にすぎない」のであった。すると「力」と「その発現」との「区別」は「空虚な透明な区別・映現〔仮象〕」であり、「反省した統一の自己自身との媒介」とは「自立的な存立そのもの」であるから、「この映現とは自立的な存立そのものであるところの媒介である」。

『資本論』である。「盲信する wännen」すなわち「誤って思い込む」である。ではヴァンダリントはなぜ、「商品価格は一国に存在する金銀の総量によって規定されると盲信する」のか。彼は「一国に存在する金銀の総量」と「埋蔵された貨幣」とを「区別」する——‘befindlich’は「(或る場所・状態に) ある」だが、‘vergraben’は「埋めて隠す」であるから隠されてそこにはない——。しかし実はかかる区別は——「隠されてそこにはない」とは「(その場所で・隠された状態に) ある」ことだから——「空虚な透明な区別・映現〔仮象〕」である。つまり「この映現は自立的な存立そのもの〔一国に存在する金銀の

総量]であるところの「存在する金銀の総量と埋蔵された貨幣の」媒介である」のだが、ヴァンダリントはこのことを理解しない——言語事実によって補足しておこう。上に示したように、「食べれる」(ら抜き)の使用者はすでに「食べられる」のそれを凌駕している。その限り「食べられる」: 正用、「食べれる」: 誤用という区別はいまや「空虚な透明な区別・映現」である。実際「食べれる」と聞いてこれを理解できない日本語話者はいない。つまり「この映現は自立的な存立そのもの〔「食べる」の可能表現〕であるところの〔「食べられる」と「食べれる」の〕媒介である」。非文法的との理由で「食べれる」を無視するなら、ら抜きに対する好悪の情は別にして、ヴァンダリントと同じ弊に陥る——。

(10)

〈資〉 第 3 章 第 3 節貨幣 a 蓄蔵貨幣の形成 3 パラグラフ 第 7 文～第 8 文

⑦彼の指摘によれば、一六〇二年から一七三四年までのあいだに、インド人は、もともとアメリカからヨーロッパにきた一億五〇〇〇万ポンド・スターリングの銀を埋蔵した。Von 1602 – 1734, bemerkt er, vergruben sie 150 Millionen Pfd. St. Silber, die ursprünglich von Amerika nach Europa kamen. ⑧一八五六年から一八六六年までに、つまり一〇年間に、イギリスは、それ以前にオーストラリアの金と交換して得られた一億二〇〇〇万ポンド・スターリングの銀をインドと中国に輸出した(中国に輸出された銀は大部分ふたたびインドに流入した)。Von 1856 – 1866, also in 10 Jahren, exportierte England nach Indien und China (das nach China exportierte Metall fließt größtenteils wieder nach Indien) 120 Millionen Pfd. St. in Silber, welches vorher gegen australisches Gold eingewechselt wurde.

〈大〉 C 外のものと内のものとの相関 1 パラグラフ 第 10 文

それら自身のもとで自己を揚棄する対立した〔二つの〕規定があるだけでなく、またそれらの規定の運動が移行する運動であるだけでなく、一方ではそれから〔運動が〕はじまり・他在への移行がなされた直接態がそれ自身定立された直接態としてのみあるのであり、他方ではそのことによって〔二つの〕規定のそれぞれがそれらの直接態においてすでにそれぞれの他方の規定との統一であり、移行する運動はこのことによってまた同じく端的に自己を定立する自己への復帰なのである。Es sind nicht nur entgegengesetzte Bestimmungen, die sich an ihnen selbst aufheben, und ihre Bewegung [ist] nicht nur ein Übergehen, sondern teils ist die Unmittelbarkeit, von der aufgefangen und ins und ins Anderssein übergegangen wurde, selbst nur als gesetzte, teils ist dadurch jede der Bestimmungen in ihrer Unmittelbarkeit schon die Einheit mit ihrer anderen und das Übergehen dadurch schlechthin ebensosehr die sich setzende Rückkehr in sich.

言語事実を当てはめることで、『大論理学』の理解は容易になろう。

「それから〔運動が〕はじまり・他在への移行がなされた直接態」: 「食べれる」

「それ自身定立された直接態としてのみある」: 「食べれる」はいまや多数派である

「〔二つの〕規定のそれぞれ」: 「食べられる」と「食べれる」

「他方では…」: 「食べられる」(旧形)と「食べれる」(新形)とはいまや「共存している」

『資本論』では第7文が『大論理学』の「一方では…」に、第8文が「他方では…」に対応する。第7文「もともとアメリカからヨーロッパに來た一億五〇〇〇万ポンド・スターリングの銀」は「それ〔アメリカ〕からはじまり・他在への移行がなされた〔ヨーロッパに來た〕直接態」であり、その銀を「埋藏した」のであるから「直接態はそれ自身定立された直接態としてのみある」——「貨幣が蓄蔵貨幣に化石する」ことにおいて「貨幣」は「他者として定立されている」のであった。(5) 参照——。

第8文。「〔イギリスが〕金と交換して得られた銀」と「〔インド人が〕埋藏した銀」とは「〔二つの〕規定のそれぞれ」である。そして前者は「インドと中国に輸出され〔てインドに輸出された分は埋藏され〕」、さらに「中国に輸出された銀は大部分ふたたびインドに流入して」インド人が埋藏したのだから、「〔二つの〕規定のそれぞれがそれらの直接態においてすでにそれぞれの他方の規定との統一である」。つまり「〔オーストラリアからの〕移行する運動はこのことによってまた同じく端的に自己を定立する自己〔埋藏〕への復帰なのである」。

(11)

＜資＞ 第3章 第3節貨幣 a 蓄蔵貨幣の形成 4パラグラフ 第1文～第3文

①商品生産がいっそう発展するにつれて、どの商品生産者も、^{ネルヴス・レリウム}“万物の神経”である「社会的動産担保」を確保しなければならなくなる。Mit mehr entwickelter Waarenproduktion muß jeder Waarenproducent sich den nexus rerum, das “gesellschaftliche Faustpfand” sichern. ②彼の欲求は絶えず更新され、他人の商品を絶えず買うことを命じるが、他面では彼自身の商品の生産と販売は時間を要し、また偶然に左右される。Seine Bedürfnisse erneuern sich unaufhörlich und gebieten unaufhörlichen Kauf fremder Waare, während Produktion und Verkauf seiner eignen Waare Zeit kosten und von Zufällen abhängen. ③売ることなしに買うためには、彼は、あらかじめ、買うことなしに売っていなければならない。Um zu kaufen, ohne zu verkaufen, muß er vorher verkauft haben, ohne zu kaufen.

＜大＞ C外のもとの内のもとの相関 2パラグラフ 第1文

内^のもの^は、存^在の形式としての外^のもの^に対して、反^省した直接態ないしは本質^の形式として規定されているが、しかし両者はただ一^つの同一性である。Das Innere ist als die Form der reflektierten Unmittelbarkeit oder des Wesens gegen das Äußere als die Form des Seins bestimmt, aber beide sind nur eine Identität.

『大論理学』は「C外のもとの内のもとの相関」1パラグラフで「全体と諸部分との相関」・「力とその発現との相関」と「外のもとの内のもとの相関」とを対比し、後者への展開を説いた。それを承けての2パラグラフなので、まずは「外のもとの内のもとの相関」を総括的に把握する。一方が「存在の形式としての外のもの」であるのだから、他方は「本質の形式としての内のもの」であり、後者が「反省した直接態」であるから前者は「反省していない直接態」・すなわち「直接的な直接態」である。つまり「内^のもの^は」は「直接的でない直接態」である。しかし「存^在の真^理態^は本^質である」(WdL II S.13) のだから、「両者〔外のもとの内のもの〕はただ一つの同一性である」。

『資本論』邦訳書の注は次を説く：「初版をはじめ多くの版では“万物の連結”（^{ネクス・レルム}債務奴隷の意味もある）となっているが、『経済学批判』では「神経」であり、フランス語版でまた「神経」となり、その後の多くの版でもそうになっている。」本稿もまた‘nervus rerum’として読む。

さて「社会的動産担保」とは「貨幣」であり、それは「万物の神経」であるから「内のもの」である。そして『資本論』冒頭「商品は、なによりもまず、その諸属性によってなんらかの種類の人間的欲求を満たす一つの物、一つの外的対象、である」（p.59）と説かれたように、一方「欲求」は「商品の諸属性によって満たされる」ところの「反省した直接態ないしは本質の形式」であり、他方「外的対象」たる「商品」は「存在の形式としての外のもの」である——人が「他人の商品を絶えず買い」、また「彼自身の商品の生産と販売は時間を要し、また偶然に左右される」ゆえん——。「買うことなしに売る」とき「社会的動産担保」は彼のもとに存在し、しかしそれは「売ることなしに買うため」すなわち「欲求」を満たすためである。これは換言して「存在の真理態は本質である」ということだから、「両者〔外のものと内のもの〕はただ一つの同一性である」。

(12)

＜資＞ 第3章 第3節貨幣 a 蓄蔵貨幣の形成 4パラグラフ 第4文

こうしたやり方は、一般的な規模で行なわれるとすれば、自己矛盾におちいるように見える。

Diese Operation, auf allgemeiner Stufenleiter ausgeführt, scheint sich selbst zu widersprechen.

＜大＞ C 外のものと内のものとの相関 2パラグラフ 第2文

——この同一性は第一に内容にみちた基礎としての両者のしっかりとした統一であり、または、そのもとでは両規定が無関心的な・外的な契機であるところの絶対的な事柄である。*Diese Identität ist erstens die gediegende Einheit beider als inhaltssvolle Grundlage oder die absolute Sache, an der die beiden Bestimmungen gleichgültige, äußerliche Momente sind.*

以文社版『大論理学』の訳者注（寺沢恒信）を参照しておこう。

「事柄」ということばは、すでに第一編第三章Cの「b 絶対的な無制約的なもの」において「事柄自体そのもの」という形で使われた。そこにつけた訳者注で述べたように、「絶対的な無制約的なもの」が「事柄自体そのもの」とよばれるのは、「全体」とか「総体性」とか言い表わすほかには表現しにくいものの実質を、その正体がまだ明らかにされないままで、何とか表現しようとするためにであった。事情はここでも同様である。内のものと外のものとの同一性が「絶対的な事柄」（*die absolute Sache*）とよばれており、そしてそれはこれら両者の「内容にみちた基礎」であるといわれているが、しかしそれだけでは「絶対的な事柄」とは何であるか、その実質はまだ明らかにされていない。しかしそれにもかかわらず、それはきわめて重みのあるもの・今後の展開において中核的な役割をはたすことが予想されるものである。このような、総体性であるがその実質がまだ明らかなでないものを表現したい場合に、ヘーゲルは「事柄」（*das Sache*）ということばを使うのである。（2p.377 訳者注18）

さて「絶対的な事柄」を命題「SはPである」で表わそう。すると形式を異にする「両者」[S・P]が「SはPである」の「同一性」なのだから、「この同一性は内容にみちた基礎としての両者のしっかりとした統一である」。「または」、SはPでなく・PはSでないにもかかわらず・あるいはむしろそのゆえに「両者のしっかりとした統一である」のだから、「そのもとでは両規定が無関心的な・外的な契機である」。

『資本論』で「こうしたやり方」は「(売ることなしに買うために) 買うことなしに売る」、である。「買う」ことで「欲求」が満たされ、そのために「売る」のだから、「買うことなしに売る」ことは「自己矛盾におちいるように見える」。ここで「矛盾」と謂われるその論理は次である。「一般的な allgemein 規模」すなわち「普遍的なもの」であるから、それは「絶対的な事柄」である。つまり「両者のしっかりとした[混ざり物のない]統一」において当の「両規定[買う・売る]が無関心的な・外的な契機である」のだから——「買うことなしに売る」——、こうした「(ただ一つの) 同一性」(買うことなしに売る)は「自己矛盾におちいるように見える」。

(13)

<資> 第3章 第3節貨幣 a 蓄蔵貨幣の形成 4パラグラフ 第5文～第11文

⑤しかし、貴金属は、それらの産源地では、じかに他の諸商品と交換される。An ihren Produktionsquellen jedoch tauschen sich die edlen Metalle direkt mit andren Waaren aus. ⑥ここでは、販売(商品所有者の側での)が、購買(金銀の所有者の側での)なしに行なわれる。Es findet hier Verkauf (auf Seite der Waarenbesitzer) ohne Kauf (auf Seite der Gold- und Silberbesitzer) statt. ⑦そして、それ以後の、後続の購買をとまなわない販売は、単にすべての商品所有者のあいだへの貴金属の再配分を媒介するだけである。Und spätere Verkäufe ohne nachfolgende Käufe vermitteln bloß die weitere Vertheilung der edlen Metalle unter alle Waarenbesitzer. ⑧こうして、交易のすべての地点に、きわめて種々さまざまな規模での金銀の財宝が生まれる。So entstehen auf allen Punkten des Verkehrs Gold- und Silberschätze vom verschiedensten Umfang. ⑨商品を交換価値として、または交換価値を商品として固持する可能性とともに、貴金属が目覚める。Mit der Möglichkeit, die Waare als Tauschwerth oder den Tauschwerth als Waare festzuhalten, erwacht die Goldgier. ⑩商品流通の拡大とともに、貨幣——富の、いつでも出動できる、絶対的社会的な形態——の力が増大する。Mit der Ausdehnung der Waarencirkulation wächst die Macht des Geldes, der stets schlagfertigen, absolut gesellschaftlichen Form des Reichthums. ⑪「金はすばらしい物である! Gold ist ein wunderbares Ding! 金をもつ者は、自分の望むことはなんでもできる。Wer dasselbe besitzt, ist Herr von allem, was er wünscht. 金をもってすれば、魂を天国に送り込むこともできる。Durch Gold kann man sogar Seelen in das Paradies gelangen lassen.」(コロンブス『ジャマイカからの手紙』、一五〇三年 Columbus, im Brief aus Jamaica, 1503.)

<大> C 外のものとの内ものとの相関 2パラグラフ 第3文

その限りこの同一性は内容であり、また内のものであるところの総体性である、そしてこの内ものはまた同じく外的になるが、しかしこの外のものにおいて成ったもの・ないしは移行した

もの「[になってしまうの]」ではなくて、自己自身に等しい。Insofern ist sie Inhalt und die Totalität, welche das Innere ist, das ebensosehr äußerlich wird, aber darin nicht ein Gewordenes oder Übergegangenes, sondern sich selbst gleich ist.

『大論理学』前文では「同一性」の二面が「または oder」で結ばれ、それを承けてここでも「内
のものはまた同じく ebensosehr 外的になる」と説かれる。これは両者「内のもとの外のもの」が「直接的な肯定的同一性」(WdL II S.205)であることだから、「内のもとの外のものにおいて成ったもの・ないしは移行したもの「[になってしまうの]」ではなくて、自己自身に等しい。

『資本論』⑤「じかに direkt」とあるのは「内のもとの外のもの」が「直接的な肯定的同一性」であることに照応する。すなわち「貴金属」(内のもの)と「他の諸商品」(外のもの)とが「じかに交換される」のだから、両者の「同一性」である。

⑥の原注に「厳密な意味での購買は、金または銀を、すでに商品の転化された姿態として、または販売の産物として、想定する」とあるように、ここでは「購買(金銀の所有者の側での)」は「貨幣と商品との交換」すなわち「形態[形式]変換 Formwechsel」ではない。それゆえ「この[交換の]同一性は内容である」。

そして「この同一性は、また内のものであるところの総体性である」から、⑦「それ以後の、後続の購買をとみなない販売は、単にすべての商品所有者のあいだへの貴金属「内のもの」の再配分を媒介するだけである」と謂われる。

⑧「こうして、交易のすべての地点に、きわめて種々さまざまな規模での金銀の財宝が生まれる」が、これは「この内のもとの貴金属」がまた同じく外的になる」ことにほかならない——「交易」なる外の場。「商品交換は、共同体の終わるところで、諸共同体が他の諸共同体または他の諸共同体の諸成員と接触する点で、始まる」(p.150)——。

⑨「固持する festhalten」については『大論理学』に次の使用例がある。

<大> こうして形式を固定すること dies Festhalten der Form は一般に規定態の側面である。この側面にしたがって定立されているものは、全体の実在的な総体性ではなくて、ただ形式という規定態のうちにあるにすぎない総体性ないしは事柄そのものである；(WdL II S.181)

そしてここでも「交換価値を[Gならぬ]商品として固持する」のであるからそれは「形式を固定すること」であり、その「可能性とともに、貴金属が目覚める」と謂う。「可能性」は「たんに定立されたものにすぎないとして、あるいはまた同じく即自的であるべきではないと規定された、即自存在である」(WdL II S.204)から、「交換価値を商品として固持する可能性」においては貴金属(内のももの)もまた「即自的であるべきではないと規定された、即自存在」であり、だから「貴金属が目覚める」のである。そしてそれが即自存在であれば、「内のもものは、しかしこの外のものにおいて[すでに]成ったものではない」。

⑩「貨幣」(内のももの)は「富の、いつでも出動できる stets schlagfertig、絶対的社会的な形態」——‘schlagfertig’:「当意即妙の」——であるから、それは「外のもの[他の諸商品]において移行したものの」

ではない。

⑪「金は不思議な[すばらしい] wunderbar 物である！ 金をもつ者は、望むことすべての主人だ。金をもってすれば、魂を天国に送り込む[届ける] ことすらできる」。これは「内のもの」(金)が「外のもの[天国]において、自己自身に等しい[主人である]」からである。

(14)

＜資＞ 第3章 第3節貨幣 a 蓄蔵貨幣の形成 4パラグラフ 第12文～第15文

⑫貨幣を見ても、なにがそれに転化しているかはわからないが、あらゆるものが、商品であろうとなかろうと、貨幣に転化する。Da dem Geld nicht anzusehn, was in es verwandelt ist, verwandelt sich alles, Waare oder nicht, in Geld. ⑬すべてのものが売れるものとなり、買えるものとなる。Alles wird verkäuflich und kaufbar. ⑭流通は、あらゆるものがそこに飛び込み、貨幣結晶として出てくる大きな社会的蒸留器^{レトリクト}となる。Die Cirkulation wird die große gesellschaftliche Retorte, worin alles hineinfliegt, um als Geldkrystall wieder herauszukommen. ⑮この錬金術には聖者の骨さえ抵抗できないのであるから、もっとか弱い“人間の取り引きの外にある聖なる物”[フェニキアの乙女のこと]にいたっては、なおさらそうである。Dieser Alchymie widerstehn nicht einmal Heiligenknochen und noch viel weniger minder grobe res sacrosanctae, extra commercium hominum.

＜大＞ C 外のものと内のものとの相関 2パラグラフ 第4文

外のものはこの規定にしたがえばたんに内容に関して内のものに等しいだけでなく、両者はただ一つの事柄なのである。Das Äußere ist nach dieser Bestimmung dem Inneren, dem Inhalte nach nicht nur gleich, sondern beide sind nur eine Sache.

『大論理学』で「この規定」とは「内のものは、外のものにおいて、自己自身に等しい」という規定である。つまり「直接的な肯定的同一性」から一步を進めて——「外のものはこの規定にしたがえばたんに内容に関して内のものに等しいだけでなく」——、「両者はただ一つの事柄なのである」。

『資本論』である。⑫「あらゆるもの[外のもの]が、貨幣[内のもの]に転化し」、⑬「すべてのものが売れるもの[内容]となり、買えるもの[内容]となる」のだから、「外のものはこの規定にしたがえば内容に関して内のものに等しい」。そして⑭「流通」すなわち「あらゆるものがそこに飛び込み、貨幣結晶として出てくる大きな社会的蒸留器」は「ただ一つの事柄」である。⑮「フェニキアの乙女」も例外ではありえない。

(15)

＜資＞ 第3章 第3節貨幣 a 蓄蔵貨幣の形成 4パラグラフ 第16文～第20文

⑯貨幣においては諸商品のあらゆる質的区別が消え去っているように、貨幣は貨幣でまた、徹底的な水平派として、あらゆる区別を消し去る。Wie im Geld aller qualitative Unterschied der Waaren ausgelöscht ist, löscht es seinerseits als radikaler Leveller alle Unterschiede aus. ⑰しかし、貨幣はそれ自身商品であり、だれの私有財産ともなりうる外的な物である。Das Geld ist aber selbst

Waare, ein äußerlich Ding, das Privateigenthum eines Jeden werden kann. ⑮こうして、社会的な力が私人の私的な力になる。Die gesellschaftliche Macht wird so zur Privatmacht der Privatperson. ⑯だから、古典古代の社会は、貨幣を、社会の経済的および道徳的秩序の破壊者として非難するのである。Die antike Gesellschaft denuncirt es daher als die Scheidemünze ihrer ökonomischen und sittlichen Ordnung. ⑰すでにその幼年期にプルストの髪をつかんで地中から引きずり出した近代社会は、黄金の聖杯を、そのもっとも独自の生活原理の輝ける化身として歓迎する。Die moderne Gesellschaft, die schon in ihren Kinderjahren den Plutus an den Haaren aus den Eingeweiden der Erde herauszieht, begrüßt im Goldgral die glänzende Inkarnation ihres eigensten Lebensprinzips.

<大> C 外のものと内のものとの相関 2 パラグラフ 第 5 文

——しかし自己との単一な同一性としてのこの事柄はそれの形式規定からは差異されている、換言すれば形式規定は事柄にとって外的である Aber diese Sache als *einfache Identität* mit sich ist verschieden von *ihren Formbestimmungen*, oder diese sind ihr äußerlich ;

言語事実が『大論理学』の例をなす。「食べられる」と「食べれる」との「共存」において、「事柄」(言語交通)は「自己との単一な同一性」である——『資本論』を先取りして準えれば、「共存の言語交通においては諸形のあらゆる質的区別が消え去っている」——。けれども「この事柄はそれの形式規定からは差異されている」、「食べられる」と「食べれる」とはその「形式」を異にするからである。つまり「形式規定は事柄にとって外的である」。

『資本論』である。⑱「貨幣においては諸商品のあらゆる質的区別が消え去っているように、貨幣は貨幣でまた、徹底的な水平派として、あらゆる区別を消し去る」、ということは「貨幣があらゆる区別を消す *auslöscht*」ゆえに「あらゆる質的区別が消される *ausgelöscht*」のである。換言して——「区別を消す」ゆえ「区別が消される」のだから——「貨幣」(この事柄)は「自己との単一な同一性」である。

⑲「しかし、貨幣はそれ自身商品であり、だれの私有財産ともなりうる外的な物である」、つまり「貨幣」は「存在の形式としての外のもの」(商品)として把握され〔(11) 参照〕、すると「この事柄〔貨幣〕はそれの形式規定からは差異されている」。

⑳「こうして、社会的な力が私人の私的な力になる」が、「力が力になる」のだから「[社会的・私的という]形式規定は事柄にとって外的である」。それゆえ次のようなことが生じる。すなわち、一方㉑「古典古代の社会が、貨幣を、社会の経済的および道徳的秩序の破壊者として非難し」、他方㉒「すでにその幼年期にプルストの髪をつかんで地中から引きずり出した近代社会が、黄金の聖杯を、そのもっとも独自の生活原理の輝ける化身として歓迎する」——言語事実に即して言えば、一方日本人の約半数は「食べれる」を日本語の乱れとして非難し、他方残りの半数は新しい表現として歓迎している——。

(16)

<資> 第 3 章 第 3 節貨幣 a 蓄蔵貨幣の形成 5 パラグラフ 第 1 文～第 5 文

①使用価値としての商品は一つの特異な欲求を満たし、素材的富の一つの特異な要素をなす。

Die Waare als Gebrauchswerth befriedigt ein besonderes Bedürfniß und bildet ein besonderes Element des stofflichen Reichthums. ②ところが、商品の価値は、素材的富のあらゆる要素に対してその商品がもつ引力の程度をはかる尺度となり、それゆえ、その商品の所有者がもつ社会的富の尺度となる。Aber der Werth der Waare mißt den Grad ihrer Attraktionskraft auf alle Elemente des stofflichen Reichthums, daher den gesellschaftlichen Reichthum ihres Besitzers. ③未開の単純な商品所有者にとっては、西ヨーロッパの農民にとってさえ、価値は価値形態とは不可分のものであり、それゆえ、金銀財宝の増加が価値の増加である。Dem barbarisch einfachen Waarenbesitzer, selbst einem westeuropäischen Bauer, ist der Werth unzertrennlich von der Werthform, Vermehrung des Gold- und Silberschatzes daher Werthvermehrung. ④確かに、貨幣の価値は——貨幣自身の価値変動の結果としてであれ、諸商品の価値変動の結果としてであれ——変動する。Allerdings wechselt der Werth des Geldes, sei es in Folge seines eignen Werthwechsels, sei es des Werthwechsels der Waaren. ⑤しかし、このことは、一面では、二〇〇オンスの金が一〇〇オンスの金よりも、三〇〇オンスの金が一〇〇オンスの金よりも、依然として大きな価値を含んでいるということをさまたげないし、他面では、この物の金属的自然形態が依然としてすべての商品の一般的等価形態であり、すべての人間的労働の直接的に社会的な化身であることをさまたげるものでもない。Dies verhindert aber einerseits nicht, daß 200 Unzen Gold nach wie vor mehr Werth enthalten als 100, 300 mehr als 200 u.s.w., noch andererseits daß die metallne Naturalform dieses Dings die allgemeine Aequivalentform aller Waaren bleibt, die unmittelbar gesellschaftliche Inkarnation aller menschlichen Arbeit.

<大> C 外のものとの内のものとの相関 2 パラグラフ 第 6 文

事柄はその限りでそれ自身が自分の外面態から差異されている内のものである。sie ist insofern selbst ein Inneres, das von ihrer Äußerlichkeit verschieden ist.

「[その] 形式規定が事柄にとって外的である」のだから、「事柄[内容]はその限りでそれ自身が自分の外面態[形式]から差異されている内のものである」。

そこで『資本論』も「差異」について説く。①「使用価値としての商品」すなわち「素材的富の一つの特殊な要素」に対してある gegenüber ところの②「商品の価値」は「事柄」であり、「素材的富のあらゆる要素に対してその商品がもつ引力の程度をはかる尺度となり、それゆえ、その商品の所有者がもつ社会的富の尺度[内のもの]となる」。そして③「価値[内のもの]は価値形態[外のもの]とは不可分である」から、④「確かに、貨幣の価値は変動する」にしても、⑤「この物[貨幣]の金属的自然形態[形式]が依然としてすべての商品の一般的等価形態[内のもの]であり、すべての人間的労働の直接的に社会的な化身であること」はさまたげられない。「事柄[価値]はそれ自身が自分の外面態から差異されている内のものである」ゆえんである。

(17)

<資> 第 3 章 第 3 節貨幣 a 蓄蔵貨幣の形成 5 パラグラフ 第 6 文～第 10 文

⑥蓄蔵貨幣形成の衝動は、その本性上、限度を知らない。Der Trieb der Schatzbildung ist von

Natur maßlos. ⑦貨幣は、どの商品にも直接的に転化されうるものであるから、質的には、あるいはその形態からすれば、無制限なもの、すなわち素材の富の一般的代表者である。Qualitativ oder seiner Form nach ist das Geld schrankenlos, d.h. allgemeiner Repräsentant des stofflichen Reichthums, weil in jede Waare unmittelbar umsetzbar. ⑧しかし、同時に、どの現実の貨幣額も、量的に制限されたものであり、それゆえまたその効力を制限された購買手段であるにすぎない。Aber zugleich ist jede wirkliche Geldsumme quantitativ beschränkt, daher auch nur Kaufmittel von beschränkter Wirkung. ⑨貨幣の量的制限と質的無制限性とのあいだのこの矛盾は、貨幣蓄蔵者を、蓄積のシシュフォス労働に絶えず追い返す。Dieser Widerspruch zwischen der quantitativen Schranke und der qualitativen Schrankenlosigkeit des Geldes treibt den Schatzbildner stets zurück zur Sisyphusarbeit der Akkumulation. ⑩彼は、新しい国を征服するたびに新しい国境に出くわす世界征服者のようなものである。Es geht ihm wie dem Welteroberer, der mit jedem neuen Land nur eine neue Grenze erobert.

<大> C 外のものと内のものとの相関 2 パラグラフ 第 7 文

だがこの外面態は、二つの〔形式〕規定そのもの・すなわち内のものと外のものが事柄をつくりなしている、ということに存する。Diese Äußerlichkeit aber besteht darin, daß die beiden Bestimmungen selbst, nämlich das Innere und Äußere, sie ausmachen.

先には「事柄」について、「両規定〔内のものと外のもの〕が無関心的な・外的な契機である」ことが説かれた（2 パラグラフ第 2 文）。すなわち「二つの〔形式〕規定そのもの・すなわち内のものと外のものが事柄をつくりなしている」のだが、そのように「反省した統一はこの統一自身を外面態へと移し変える運動」（1 パラグラフ第 5 文）なのであった。よって「この外面態は、二つの〔形式〕規定そのもの・すなわち内のものと外のものが事柄をつくりなしている、ということに存する」と謂われる。

『資本論』⑥「蓄蔵貨幣形成の衝動は、その本性上、限度を知らないmaßlos」のであるから、「蓄蔵貨幣形成の衝動」は「没度量的なもの das Maßlose」である——なお「度量 maß」は「質的な量 die qualitative Quantität」（WdL I S.394）である——。すなわち「度量の無限性における度量・真理態における度量」（寺沢恒信）として、それは「真に存続しつづける独立した物質・事柄 die wahrhaft bestehenbleibende, selbständige Materie, Sache」（WdL I S.443）であり、「二つの〔形式〕規定そのもの・すなわち内のものと外のものが事柄をつくりなしている」と謂われるその「事柄」はこれである。そして「二つの〔形式〕規定そのもの」は『資本論』に即して⑦「形態〔形式〕に従って seiner Form nach 無制限的なもの」と⑧「〔形態に従って〕制限されたもの」であり、また「内のものと外のもの」は⑨「貨幣の量的制限と質的無制限性」である——ただし対応は「内のもの」:「質的無制限性」（素材の富の一般的代表者）、「外のもの」:「量的制限」（購買手段たる現実の貨幣額）である——。そこで『大論理学』に準えて『資本論』は次のように言い換えられる:「(私有財産の) 蓄積〔外面態〕は、貨幣の量的制限と質的無制限性とが蓄蔵貨幣形成の衝動〔事柄〕をつくりなしている、ということに存する」。そして「蓄蔵貨幣形成の衝動」（没度量的なもの）は「度量の無限性における度量」であるゆえ⑨「蓄積のシシュフォス労働

働」と謂う。

(18)

＜資＞ 第3章 第3節貨幣 a 蓄蔵貨幣の形成 6 パラグラフ 第1文～第3文

①金を貨幣として、それゆえまた蓄蔵貨幣形成の要素として、とどめておくためには、金が流通すること、すなわち購買手段として消費手段のなかに消えてしまうことが、阻止されなければならない。Um das Gold als Geld festzuhalten und daher als Element der Schatzbildung, muß es verhindert werden zu cirkulieren oder als Kaufmittel sich in Genußmittel aufzulösen. ②だから、貨幣蓄蔵者は、金物神に、彼の肉体的欲望を犠牲としてささげる。Der Schatzbildner opfert daher dem Goldfetisch seine Fleischeslust. ③彼は禁欲の福音を厳粛に受け取る。Er macht Ernst mit dem Evangelium der Entsagung.

＜大＞ C 外のものと内のものとの相関 2 パラグラフ 第8文

だが事柄はそれ自身が両者の統一にほかならない。Aber die Sache ist selbst nichts anderes als die Einheit beider.

前文の「外面態」に対して、ここでは「事柄」である。それが「両者〔内のものと外のもの〕のしっかりとした統一である」ことは2パラグラフ第2文が説いていた。そこで「事柄はそれ自身が両者の統一にほかならない」。

『資本論』で「事柄」は「蓄蔵貨幣形成」であり、そのためには①「金が流通すること、すなわち購買手段として消費手段のなかに消えてしまうことが、阻止されなければならない」。②「だから、貨幣蓄蔵者は、金物神に、彼の肉体的欲望を犠牲としてささげる」が、これは「外のもの」である——‘Fleisch’:「霊 Seele に対する肉」——。③‘mit etw Ernst machen’は「或る事を本気で扱う」であるから、‘das Evangelium der Entsagung’は扱われる「事柄」・「蓄蔵貨幣形成」である。それを「本気で扱う」のは「内のもの」においてであるから、ここでも「貨幣蓄蔵者が禁欲の福音を厳粛に受け取る」ことにおいて、「事柄はそれ自身が両者の統一にほかならない」。

(19)

＜資＞ 第3章 第3節貨幣 a 蓄蔵貨幣の形成 6 パラグラフ 第4文～第6文

④他面、彼は、彼が商品として流通に投じたものだけを、貨幣としてそこから引きあげることができるだけである。Andererseits kann er der Cirkulation nur in Geld entziehen, was er ihr in Waare gibt. ⑤彼は、たくさん生産すればするほど、それだけたくさん売ることができる。Je mehr er producirt, desto mehr kann er verkaufen. ⑥だから、勤勉、節約、および貪欲が彼の主徳をなし、たくさん売って少ししか買わないことが、彼の経済学の総括をなす。Arbeitsamkeit, Sparsamkeit und Geiz bilden daher seine Kardinaltugenden, viel verkaufen, wenig kaufen, die Summe seiner politischen Oekonomie.

<大> C 外のものと内のものとの相関 2 パラグラフ 第 9 文

こうして両側面は内容に関してふたたび同じものである。Somit sind beide Seiten dem Inhalte nach wieder dasselbe.

「〔形式規定は事柄にとって外的であるので〕事柄はそれ自身が自分の外面態〔外のもの〕から差異されている内のものである」(2 パラグラフ第 6 文) けれども、その「外面態は内のものと外のものが事柄を作りなしている、ということに存する」(同第 7 文) のであり、また「事柄〔内のもの〕はそれ自身が両者の統一にほかならない」(同第 8 文) のであった。ゆえに「両側面は〔それぞれの形式規定は異なっても〕内容に関してふたたび同じものである」。

『資本論』の要点は第 6 文にある。第 4 文・第 5 文は「蓄蔵貨幣形成」の「内容」を説く。そして⑥「主徳(基本道徳)」は「内のもの」であり「経済学 politische Oekonomie」は「外のもの」である——‘Tugend’: 「徳・価値高きもの」。また ‘politisch ← politique ← politicus ← πολιτικός’: 「公共の」——。そして「勤勉、節約、および貪欲」は「たくさん売って少ししか買わない」ことと同じ内容である・すなわち「両側面は内容に関してふたたび同じものである」。

(20)

<資> 第 3 章 第 3 節貨幣 a 蓄蔵貨幣の形成 7 パラグラフ

①蓄蔵貨幣の直接的形態とならんで、その審美的形態、すなわち金銀製品の所有が行なわれる。Neben der unmittelbaren Form des Schatzes läuft seine ästhetische Form, der Besitz von Gold- und Silberwaren. ②それは、ブルジョア社会の富とともに成長する。Er wächst mit dem Reichthum der bürgerlichen Gesellschaft. ③「“金持ちになろう。さもなければ、金持ちらしく見せよう”」(ディドロ)。“Soyons riches ou paraissions riches.” (Diderot.) ④こうして、一面では、金銀の絶えず拡大される市場が、金銀の貨幣諸機能からは独立に形成され、他面では、ことに社会的な暴風雨の時期に流出する貨幣の潜在的な供給源が形成される。Es bildet sich so theils ein stets ausgedehnter Markt für Gold und Silber, unabhängig von ihren Geldfunktionen, theils eine latente Zufuhrquelle des Geldes, die namentlich in gesellschaftlichen Sturmperioden fließt.

<大> C 外のものと内のものとの相関 2 パラグラフ 第 10 文

だがしかし事柄においては、両側面は相互に貫徹しあう同一性としてあり、内容にみちた基礎としてある。Aber in der Sache sind sie als sich durchdringende Identität, als inhaltvolle Grundlage.

「内容にみちた基礎」については、すでに「この〔内のものと外のものとの〕同一性は内容にみちた基礎としての両者のしっかりとした統一である」(2 パラグラフ第 2 文) とあった。そしていま「両側面は内容に関して同じものである」(前文) のだから、「〔両者の統一である〕事柄においては、両側面は相互に貫徹しあう同一性としてあり、内容にみちた基礎としてある」。

『資本論』①「蓄蔵貨幣の直接的形態とならんで、その審美的形態、すなわち金銀製品の所有が行なわれ」、前者は「内のもの」・後者は「外のもの」である。そして②「それ〔審美的形態〕はブル

ジョア社会の富とともに成長する」のだから、「両側面〔直接的形態・内のものと審美的形態・外のもの〕は相互に貫徹しあう同一性としてある——③「“[内のものによって] 金持ちになろう。さもなくば、[外のものによって] 金持ちらしく見せよう”」——。そして④「金銀の絶えず拡大される市場」（内のもの）と「貨幣の隠れた latent 供給源」（外のもの）という両面が「形成される」のだから、「両側面は内容にみちた基礎としてある」—— ‘latent’ は ‘nicht unmittelbar sichtbar oder zu erfassen’ であり、それが「外のもの」であるとき、「内のもの」は上述のように「直接的形態 die unmittelbare Form」である——。

(21)

<資> 第3章 第3節貨幣 a 蓄蔵貨幣の形成 8パラグラフ

①蓄蔵貨幣の形成は、金属流通の経済では、さまざまな機能を果たす。Die Schatzbildung erfüllt verschiedene Funktionen in der Oekonomie der metallischen Cirkulation. ②その第一の機能は、金銀鑄貨の通流諸条件から生じる。Die nächste Funktion entspringt aus den Umlaufsbedingungen der Geld- oder Silbermünze. ③すでに見たように、商品流通の規模、価格、および速度が絶えず変動するのにつれて、貨幣の通流総量は、休むことなく干満を繰り返す。Man hat gesehen, wie mit den beständigen Schwankungen der Waarencirkulation in Umfang, Preisen und Geschwindigkeit die Umlaufsmasse des Geldes rastlos ebbt und fluthet. ④したがって、貨幣の通流総量は、縮小したり拡大したりすることができなければならない。Sie muß also der Kontraktion und Expansion fähig sein. ⑤あるときは貨幣が鑄貨として引き寄せられ、あるときは鑄貨が貨幣としてはじき出されなければならない。Bald muß Geld als Münze attrahiert, bald Münze als Geld repelliert werden. ⑥現実に通流する貨幣総量が流通部面の飽和度に絶えず照応しているためには、一国に存在する金または銀の分量が、鑄貨機能を果たしている分量よりも大きくななければならない。Damit die wirklich umlaufende Geldmasse dem Sättigungsgrad der Cirkulationssphäre stets entspreche, muß das in einem Lande befindliche Gold- oder Silberquantum größer sein als das in Münzfunktion begriffene. ⑦この条件は、貨幣の蓄蔵貨幣形態によって満たされる。Diese Bedingung wird erfüllt durch die Schatzform des Geldes. ⑧蓄蔵貨幣の貯水池は、同時に、流通している貨幣の流出および流入の水路として役立ち、それゆえ、流通する貨幣は、その通流水路から決してあふれ出ないのである。Die Schatzreservoirs dienen zugleich als Abfuhr- und Zufuhrkanäle des cirkulierenden Geldes, welches seine Umlaufskanäle daher nie überfüllt.

<大> C 外のものと内のものとの相関 2パラグラフ 第11文

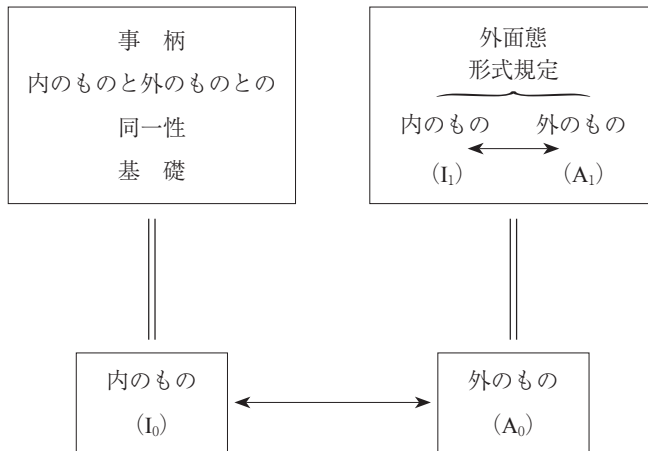
またしかし外面態においては、事柄の〔二つの〕形式として、両側面はかの同一性に対して無関心的であり、またそれだから両側面は相互に無関心的である。Aber in der Äußerlichkeit, als Formen der Sache, sind sie gegen jene Identität und somit beide gegeneinander gleichgültig.

『大論理学』に関しては、以文社版訳者（寺沢恒信）が次の訳者注を付している。

「事柄において」と「外面態において」とが対比的に述べられている。「事柄」は、前注〔本稿

(12) 参照] で述べたように、内のものと外のものと同一性であり、両者の基礎である。「外面態」とは、事柄すなわち同一性が「内のもの」と「外のもの」という形式規定のもとにある在り方である。この限りでは「内のもの」も「外のもの」もともに外面態に属する。——だがまた、「形式規定は事柄にとって外的である。事柄はその限りでそれ自身が自分の外面態から差異されている内のものである」ともいわれている。すなわち、事柄は「内のもの」であり、外面態は、文字どおり、「外のもの」である。こうして内のものと外のものと関係は、図示における I_1 と A_1 との関係と、 I_0 と A_0 との関係として、二重にとらえられているのである。(2p.377 訳者注 19)

与えられる図は次である。



『資本論』は①「蓄蔵貨幣形成が果たす機能」について説く。それは⑧「蓄蔵貨幣 [内のもの] の貯水池が、流通している貨幣 [外のもの] の流出および流入の水路として役立つ」ことであり、つまり「かの [両側面が相互に貫徹しあう] 同一性」である。さて②「この第一の機能は、金銀鑄貨の流通諸条件 [制約] から生じ」、その具体は③～⑤に説かれ、そして⑥「現実に通流する貨幣総量が流通部面の飽和度に絶えず照応しているためには、一国に存在する金または銀の分量 [内のもの] が、鑄貨機能を果たしている分量 [外のもの] よりも大きくなければならない」のである。けれども「事柄の [二つの] 形式として、[内のもの・外のもの] 両側面は [上に述べた] かの同一性に対して無関心的であり、またそれだから両側面は相互に無関心的である」。それゆえ⑦「[[⑥の説く] この条件は、貨幣の蓄蔵貨幣形態によって満たされる」にしても、それは「外面態において」のことである——つまり「貨幣の蓄蔵貨幣形態」は「内のもの (I_1)」である——。

三 「論理的構文論」

『資本論』の論理を把握する試みはこれまでも見られた。言うまでもなく、ヘーゲル論理学はつねに重要な参考書であった。「ヘーゲルの弟子」の主著を読み解こうというのだから師匠の主著が読まれるのは当然である。しかし率直に言って、そうした試みの成功したとは言い難い。その最大

の理由は勝義論理の連文的推論であることが理解されなかったことにある、そう思われる。論者たちは、例えば「否定の否定」とか「同一性と区別との同一性」とかのいわば弁証法の決まり文句を携え、『資本論』の叙述のそこかしこにそれらの具体例を見出した。けれどもこうした決まり文句を幾ら大量に仕入れても、それらが『大論理学』の読解に役立つことはまずない。このことは『大論理学』のどの一頁を開いても直ちに了解されるのであって、その連文的推論を丹念に辿ること以外『大論理学』を読み解くことは不可能である。弁証法の叙述とはまさに『大論理学』そのものなのだからである。『資本論』の読解に際しても事情は変わらない。けれどもいざそれを読む段になると、そのことはすっかり忘れ去られた。『資本論』の叙述・したがってマルクスの思考過程そのものがまさに弁証法であることを誰も理解しなかった。

そうしたなかで、しかし、『資本論』の論理を的確に把握した人物が少なくとも二人いる。ソシュールとウィトゲンシュタインである——拙稿「ソシュールは、ヘーゲルを読んだマルクスを読んだ!」、
「ウィトゲンシュタインは、ヘーゲルを読んだマルクスを読んだ!」——。そして「論理的構文論 *logische Syntax*」について次のように書いたとき、自分がマルクス（そしてヘーゲル）を読んだことにウィトゲンシュタインは自覚的ではなかったか。『論理哲学論考』3-33である。

＜論考＞ 論理的構文論においては、記号の意味は何ら役割を果たしてはならない；論理的構文論は記号の意味が問題になることなく立てられねばならず、諸表現の記述だけを前提しうる。

「言語は所詮意味であるほかないものである」（森重敏『日本文法通論』序）と言われ、また「文は人なり」とも謂われる。つまり「(連)文」の表現する「意味」はすぐれて個性的である。ではそのように個性的な「連文」が「論理」・すなわち「弁証法の一般的な運動諸形態 *ihre allgemeinen Bewegungsformen*」を表現することは如何にして可能なのか。「はじめに言葉ありき」というように、そもそもが普遍的である神の言葉であればかかる問いも存しまい。けれども神ならぬ人間がたとえ普遍的客観的な言語 *langue* を用いても、そこには自ら話手の個性が現われる。例えば「花!」のような喚体一語文が「文の原型」（森重敏『日本文法』p.2）であるのは、そこでは語的概念「花」が使用されるにしてもなお概念の一般性によっては尽くされえない・話手の把握した対象の意味が種々現われるからである——「花が咲いた。」「この花は美しい。」等。なお「花!」は *ὑποκείμενον*・*suppositio* であるから（井上忠・山内得立）、これを「文の原型」と把握するのは哲学的にも正確である——。つまり「花!」はその本質において「この花は花である」であり、同語反復的ではあるがより主観的な文的判断の表現なのである。その文的判断が連文的推論に展開するのは、話手の個性的意味・すなわち情意がその表現されることをさらに求めるからである。そして後者・連文的推論をもってしてもなお尽くすことのできない情意が「余情・余韻」として残り、それは実に言外に到ることで積極的に自らを表わす。

「言外に」とはすなわち「論理的な明指の外で」（『日本文法通論』p.28）ということである。だから逆に「論理」を把握するためには、換言して——勝義の「論理」すなわち連文的推論であるから——聞手（ないし読手）が話手（ないし書手）の「思考過程」を理解するためには、「意味」すなわち連文的推論をもってしてもなお尽くしえない話手の情意を極力排するのでなければならない。ウィトゲンシュ

タインが「記号の意味は何ら役割を果たしてはならない」と説いたのはこのことであった。学が普遍的なものを探究するとき、「論理的構文論」に立脚すべきゆえんはここにある。『資本論』の読解として無論例外ではない。

注

- (1) 『大論理学』邦訳書3巻p.14。なお付されている訳者注 (p.381) をも参照。
- (2) 本稿で各文献からの引用は、原則として邦訳書の訳文を借用し、引用頁数も邦訳書のそれを掲げる。ただし以文社版『大論理学』は初版の邦訳書であるゆえ、存在論からの引用に際しては拙訳を用いる。それとの関係で、『大論理学』からの引用頁数はすべて原書のそれを掲げる。なお邦訳書の引用に際しては使用文字種を変えることがある。
- (3) 『大論理学』初版本には、「限界の真理態は規定態一般である。——このことはこれまでに述べてきたことの成果である。」(傍点は引用者) という叙述が見出されるが、これはヘーゲル自身、論理の展開は連文において把握されると考えていたことを示している。

使用テキスト：

Marx, K., *Das Kapital*, Diez. (資本論翻訳委員会訳『資本論』第一分冊 新日本新書)

Hegel, G.W.F., *Wissenschaft der Logik I・II*, Suhrkamp. (寺沢恒信訳『大論理学』1～3 以文社)

テキスト以外の参考文献：

Hegel, G.W.F., *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften*, Suhrkamp. (真下真一訳『小論理学』 岩波書店)

Saussure, F. de, *Cours de linguistique générale*, Payot. (小林英夫訳『一般言語学講義』 岩波書店)

川崎誠「ソシュールは、ヘーゲルを読んだマルクスを読んだ！」『専修人文論集』99号。

川崎誠「ワイトゲンシュタインは、ヘーゲルを読んだマルクスを読んだ！」『専修人文論集』100号。[予定]

森重敏『日本文法通論』 風間書房。

森重敏『日本文法－主語と述語』 武蔵野書院。